

4-1 既往捕獲技術のスマート化によるシカの低密度維持手法

研究機関名 (国研) 森林機構 森林総合研究所

要約

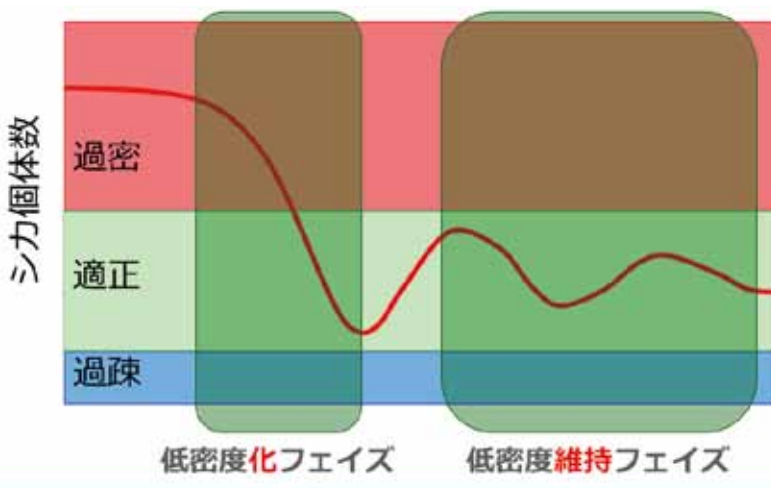
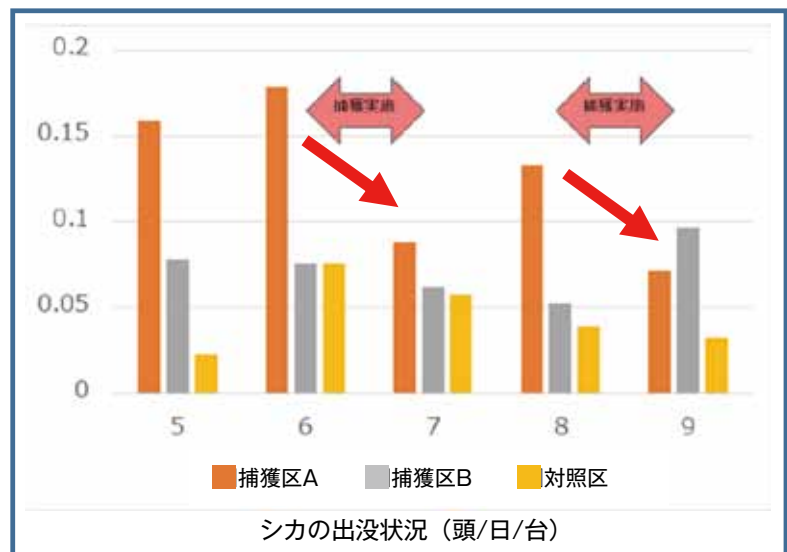
- 既往のシカ捕獲技術に遠隔通知システムを組み込むことで作業を省力化することができた。これにより、林業事業者が森林管理作業の一環として継続的にシカの個体数管理を実施できる体制を構築することができた。
- 再生林地周辺で捕獲を実施することでシカの推定生息密度が減少したことから、苗木に対する被害の軽減に役立つと考えられた。

捕獲前後のシカ推定生息密度* (頭/km²)

	捕獲前 5月	捕獲後 11月
捕獲区A	31.9	0.0
捕獲区B	28.3	7.1
対照区	10.6	10.6

*糞塊除去法による推定結果

- ・ 足くくりワナによる捕獲を実施
- ・ 約2カ月間の実施期間中に両捕獲区とも3頭ずつ捕獲



フェイズによって捕獲努力量が異なるため、低密度化フェイズでは専門的捕獲従事者による集中的な捕獲を実施し、低密度維持フェイズでの持続的な捕獲を林業事業者で担うのが望ましいと考えられる。地域毎に、フェイズに合わせた連携体制の構築が必要である。

まとめ

- 遠隔通知システムの利用により、森林管理作業の一環として林業事業者が主体となり捕獲を実施する体制を構築することができた。
- 苗木への被害が頻発する再生林地周辺を中心に捕獲を実施した結果、少ない捕獲頭数でもシカの出没状況が減少したことから、被害軽減に効果があると考えられた。